

平成 26 年度 NGO 活動状況レポート

平成 26 年度の NGO 活動状況調査は平成 27 年 2 月 11 日（水）から 17 日（火）までの 7 日間、賛助会員等 8 名をラオス人民民主共和国に派遣し、NGO 海外援助活動助成及び国際ボランティア貯金の寄附金配分を受けている「特定非営利活動法人ラオスのこども」、「梅本記念歯科奉仕団」、「公益社団法人シャンティ国際ボランティア会」の 3 団体の活動状況調査を実施しました。

「特定非営利活動法人ラオスのこども」の活動地訪問

「特定非営利活動法人ラオスのこども」は、平成 3 年度から平成 20 年度までに 14 回、国際ボランティア貯金の寄附金を、平成 26 年度には当財団の NGO 海外援助活動助成を受けてラオスの子どものための図書の作製・配布、移動図書箱の製作・配布、学校図書室の建設・運営、子どもセンターの運営等を行っています。

訪問したパクセーの空港近くにあるボンニャック小学校は、生徒 205 名、教師 14 名、1 クラス平均 20 名、MAX22 名でラオスでは規模の大きい小学校です。

校舎の端に団体が支援をした図書室があり、図書室開設後 3 年間は手厚いフォローを行い、4 年目以降は新しい書籍を配布。図書館マニュアルも出版して各学校に配布もしています。その他、読み聞かせや歌、ダンス等セミナーを教師対象に実施して、生徒の教育に活かせるようにしています。

ビエンチャンにある当団体の事務所兼図書室では、日本人スタッフ 1 名と現地スタッフ 3 名が常駐し、図書室の運営、日本から送られたラオ語訳絵本等の受付、全国の学校図書室への本の配布等の事務を行っています。

事務所の図書室ということもあり書籍数も多く、集まった小学生や中学生がそれぞれ読書をしたり、絵を描いたり。当日はスタッフが行う本の読み聞かせの実演を見せていただきました。

もう 1 か所訪問させていただいたのは、平成 15 年度に日本の ODA により建設し、ビエンチャンの教育局に寄贈されたビエンチャン教育開発センターという建物の 1 階に設置された子どもセンターで、当初は NGO による運営でしたが、現在は図書室の運営を含めて学校外での教育・啓発活動を教育開発センターが行っています。訪問当日は土曜日で、2 階の教室には 80 名ほどの大勢の子どもたちが集まり、全員で歌を歌っている姿を見ることができました。



特定非営利活動法人
ラオスのこども

「梅本記念歯科奉仕団」の活動地訪問

ハンセン病患者に対する歯科診療を実施してきた「梅本記念歯科奉仕団」は、過去に 11 回、国際ボランティア貯金の寄附金配分を受け、平成 26 年度は当財団の NGO 海外援助団体助成により事業を継続しています。

ラオス国内にハンセン病の村が 6 か所ありますが、その 1 つであるラクサムシップ村はパクセーの中心から車で 45 分位走らせたところにあります。

ラクサムシップ村のハンセン病患者は 177 名で、その親族は 531 名計 708 名となっており、村の住民は 1,834 名、周囲の村住民が 1,453 名です。

今回の活動が行われている建物に着くとコロニーの住民が 20 人程診察待ちをしていました。

医療診療の部屋では、医師により診察が行われ薬が出されますが、短期間の巡回診療のため、疾患そのものを治すのではなく痛み・腫れ等を取る主に対症療法を行っているそうです。

歯科診療の部屋には診察台が 2 台あり、日本から派遣された 3 名の歯科医師（神奈川歯科大学）とカウンターパートの歯科医師 2 名が治療にあたっていました。

天井には大きな穴が開いており雨が降ったときはどうするか心配になりました。

フットケアは、広場を挟んで反対側にある建物で行われ、患者が 2~3 名並んで椅子に腰かけ、膨らんで知覚のなくなった足裏を靴（サンダル）に合う形になるようスタッフに削ってもらっており、部屋の中では、靴職人が 1 人 1 人の足の形に合うよう靴の成型を行っていました。



梅本記念歯科奉仕団



「公益社団法人シャンティ国際ボランティア会」の事務所訪問

最後に訪問した「公益社団法人シャンティ国際ボランティア会」はラオスの古都と呼ばれているルアンパバーンに事務所を構えています。

今回は活動地まで行く時間がなかったため、現地事務所で事務所の加瀬氏から団体の活動について伺いました。

当団体は、平成3年度から16回、国際ボランティア貯金の寄附金配分を受けていますが、少数民族の子どもたちのための教材作成や教育強化の活動では平成19年度上期から平成20年度までの寄附金を受けて実施した活動です。

ルアンパバーンの活動地は北東部のヴィエンカム郡で、事務所から車で4時間もかかり、奥地の村にはさらに3時間もかかるところにあります。

143郡の中で13番目に貧困で、少数民族の構成比が80%と高く、小学校は、1村1校設置していますが、施設に問題があったり、複式学級の比率が81%と高く(全国平均は33%)、教員の指導能力不足も影響しているかもしれません。

施設は複式学級に合った様式に改め、トイレや給水設備を整える等の改善を行い、工事途中にも何回か実地調査をします。

教員の指導能力向上のために、複式学級の運営に関する研修会を20名×12回ほど実施しています。

政府発行のラオ語の教材は郡のニーズに合っていないため、団体で補助教材を作成しています。少数民族向けラオ語習得教育には、当財団が実施している平成27年度NGO海外援助活動助成が使われています。

移動図書館活動は1か所4～5日間ずつ郡内を回り、子どもたちが読書に親しむ機会を作るようにして、教員へは図書管理方法指導しています。

現地教育省が教育基本開発計画を策定しており、NGOもこれに沿った活動を行い、郡の教育担当係官と連携を図りつつ活動を続けています。



厳しい生活環境の中で生活する子どもたちは、明るく楽しげで屈託がありません。人々は穏やかで友好的です。そんな人たちを見て「何が豊かで、何が貧困なのか」「現地の生活を、現代のような生活に合わせる事が果たしてよいのか」などなど、参加者から考えさせられたと話を聞くことが出来ました。

また、政府レベルだけでなく、NGOがきめ細かく支援活動を継続していくことがラオスの発展にとって重要であり、こうしたNGO活動を資金面から支える事業の意義も大きいと感じました。